

2020年11月22日 第1回オン来ミーティング・ミーティング報告

22日は、オンラインで運営委員会をした後、公開のオンライン・ミーティングを開催しました。

本会としては、初めての経験でした。

すでに、ミーティングの案内に書かせていただいたように、

テーマは「コロナ禍の学校における P4C を用いた授業についての意見交流」

基調報告者は小学校の教員 3 名

時程は午後 4 時から午後 5 時半まで

参加者は、基調報告者 3 名、運営委員 5 名、一般の参加者が 4 名、の計 12 名という形で行いました。

司会は運営委員の金澤さん

最初の報告者は森本さんで、担任は 2 年生。学年初めは思った以上に苦しかったけれど、ようやく慣れてきた状態だということです。当初は、子どもは人の話を聞いて話すということがなかなかできなかったが、2 学期に入り、いわゆる、5W1H を使って、どのようにして問いを作るかを実際に経験してもらうようになってから、次第に対話の形が生まれていったということです。

1 時間目に道徳の教科書をベースに、テキストの理解を促し、次の時間に自分が思うこと、自分が不思議におもうことを出してもらう。「問い」という言葉は子どもは難しそうに見えたので、「ふしぎ」という言葉を使用) そして 3 時間目は特活で、自由に「ふしぎ」について P4C を実践しているというスタイル。

最近の道徳の授業では、子どもたち自身が、国語で学習した内容と結びつけて、対話を展開したのは、予想外であったという驚きを感じたということです。

次の阿弥さんはやはり 2 年生で、クラスの人数が 23 名ということで、衛生面に十分配慮して、子どもたちの間の距離を広げて、コミュニティボールを使用している通常の形で授業をしている、ということでした。

最初は学校の創立者の言葉の一つである「苦しみは魂を強くします」ということについての P4C。対話を通して、自分の経験を語ってくれ子がいて、その子の話がきっかけになって、他の子どもたちも自分の経験を語り始めるということが起こった、ということが印象的だったということです。

また、この後、「大きな木」をテキストにして、保護者も一緒に輪を作って P4C を実践したということです。ということで、「大人ってどんな人のこと」というテーマで、授業が展開。保護者は子どもたちの成長にビックリしており、他の保護者の発言が印象的であったとい

う感想が聞かれた。やはりコミュニティボールを使うと、待つことができ、思いやりの心も育つということが実感できる、ということでした。

最後に松下さんは、3年生と6年生の異学年で一緒に道徳の授業でP4Cをしたということです。コロナのこともあり、多人数でのP4Cだったので、コミュニティボールではなく、オーストラリア形式のトーキングボールを使って、ボールを転がしながら実施したということです。「考え、議論する道徳科の授業づくり」ということを考えると、オーストラリアの方法は親和性があると感じるということでした。

学会で発表されたことをベースにして、大変分かりやすく、評価の仕方など示唆に富む報告だったと思います。

その後、実際に研修してきたオーストラリアのP4Cの授業の紹介をしてくれました。

基調報告の後のディスカッション

ここでは、以下のような問いとそれに対する応答がありました。

問いを選ぶときには、教師の役割はどのくらいか： 全く、教師が介入しないという場合と、やはり教師の方から問いを提示するという場合もあるということでした。ただ、やはり、対話が興味深く展開するには、子どもが問いを選ぶということがいいのではないかということです。

板書がきちんとされている場合があったが、対話しているときにどのようにして板書しているのか： 板書をきちんとするには、やはり輪の外に教師が出て、必要に応じて対話に介入するということをしているということでした。以前にやはり板書をしていたが、今はまったくしていないという先生もいました。また、子どもの発言で素敵だなと思えるものは板書するとか、板書はしないものの、子どもの発言はほとんどノートに簡潔に記録して、その後読み直して文字化するというをしているという先生もいました。

P4Cの授業を通じて子どもの変容が見られるか：やはり、普段あまり話さない子の参加度が高まったり、話をできなくても、絵を描くとか別の形で参加する子もいる。異学年で行う場合は、お互いに対してケアする態度が育成されていく、というような意見が出されました。

議論はかなり充実した形で展開しました。基調報告者と参加者の質問が対話を深めたと思います。

(文責 梶形)